

全
日
會
報

今我々の所有すべき課題と

その実践的方法

今、我々、状況と直面する中から今後の活動の課題とそれに対する実践的な活動プランをここに展開しようと思う。

端的なパターンを我々はフランスに見た。矛盾の激化——ソルボンヌの火花——スト輸出——労資共闘の内乱化——選挙結算の野党連合の完膚なきまでの敗退。もはや我々には伝わらないヘラルド達。議會民主主義の頌大壁。——このパターンは我々に何をづきつけたのか。

一つは、望というものは身分であること。今日の大学生一般の流弊である。そして、それが自由であること。そして、それが思想と生活とのこの分断（自己疎外）は、現実がきびしいからなということに、は全然関係していない。では思想と生活を、手摺一的に提起する本質として存在する自己疎外はなぜ起きるのか。

世界各地の20以上の暴力。一状況のあらゆる矛盾を顕在化せよ」とする人間の行為。都市暴動。闘争。内部分裂。戦争……。そこにおけるさまざまなエネルギー（力学）と実体を生み出すとする方法（工学）。フランスにおいては、自己の顕在化にとどまらずその力学と工学は、実になんらかの形で歴史の変質に参与し、歴史的主体性を達成させようとした人間の行爲である。だが、この達成しえなかった人間の存在理由が、我々に何を突きつけるのか。今日の状況。その中にある人間はいかに自己の生存と対置させられているのか。我々一人々々、そしてすべての他者はその生存に何をたくしているのか。今、生存すること。それは何か。本来的には人間一人々々が望むものは、同時に、一人々々に望まれたものでなければならぬ。だが、今日の状況にあつては、それは、重の意匠にお

ては、具体的方法を選ばないでいること。そのことの中にしか、その卑劣化された事実の中にしか「△自由」と呼びうるものはない。しかも、その「△自由」は実は全然自由なではないのだ。それはたゞ生存方法の幾つかの道と呼ぶべきものである。我々は生存の具体的対象性のさなかに本来的自由を形成していかねばならない。生存すること「物をつくり出すこと。本来的なこの規定は今つくりたいもの。本当につくらなければならぬものをやるのではなく、強いられた範囲でつくらねばならない（そうしないと生きていけない）ものををつくること。それが、今日の状況を生きる人間のあり方と化している。頭の中（夢、幻想、観念）では人はなりたいものになり、つくりたいものをつくれるのに、ひとたび現実の中で具体的に生存していこうときには、すべては（若き日の思い出し）な人とテチナル

1、人間とは、その生存過程において自然の一部である。
2、人間の（他者を含めた）自然への関わりにおいて人間は生存する。
3、その関わりは、外的（自然）に存在する諸関係、諸契機をどのようにに内在化人間——思考（内部契機）としてとらえるか。そして、それをどのように外化するか（人間——行爲）（他者の外的契機）というプロセスに支えられる。
この自然という（外的でありかか）つ内的な、普通の存在をめぐって人間が内的なものと外的なものに分離された「△」のように（対象化過程の具体的内容）「△」というプロセスの志向性の中に自己疎外の範疇が存在するのである。そして、この自己疎外の範疇からもう一つ拒絶性が生まれるのである。マルクセによれば、今日の高度な工業、技術社会は、生産機械

に於ける技術・合理性の貫徹により、労働者に対する外面的規制をも労働者自身の内面的・自発的な自己規制として調達することができ、それらを通じて操作民主主義という「支配の純粹形式」すなわち「アドミニストレーション（管理）」に到達しているのだ。

唐十郎が「我々（戦後世代）には体験がない」といった。それは

我々が以上のような今日の状況の
さ中に生まれ落ちた人間だからで
ある。また、あらゆる生存の主体
性が今日の状況に限定された志同
性の中では中性的にしか発露され
ず、生存の追求（労働・思考・遊
行）それ自体の中には、個人とし
て生存を存することか許されてい
ないからである。しかし、我々に
とって体験をつくることこそ問題
ではない。自己の実存を確かめよ
うとする体験志向の行動には、か
くのごとき実体として存在する状
況と対峙してゐるはずがはない。

の内的契機に変質する。これらの
関係存在の総体が世界を形成す
る。形成された総体は彼の生存の
対象的世界を具体的実体として形
成する。この単純化によれば、我々
は次の見解に到達する。一人の人
間は歴史の中で果してきた役割は
すべて全くに等質のものである。
それはどんなに偉大な思想家でも
市井で生き、生み、死んでいった
庶民でも、彼が時代をつくり、関
係存在をつくり出してきたこの過
程と実体は、彼の生活範囲に比し
て等質である。しかし、問題は普

では今、今的情況に同かつて何を為すべきか。何における我々の行為は安保後の情況の全體的動向の中で、「我々と」とつて状況は何か。その中で、我々はどうかあらねばならないのかを問うことであつた。個の確立。実存の領域における個の確立ではなく、行為する自己としての個の確立。それこそ我々が目指したものだつた。擧る行為によつて我々自身の個別的情況（その年令に至るまで我々を支配的にとりまいていたさまざまな状況因子）と對峙するときから出発した。

我々は我々の内側を徹底的に明らかにすることによつて、まさに現象総体の内在的現象形態に到達した。しかし、内なる総体とは、その生存の個別性において原則的に個別であり、生存を世界に向けて對象化することによつて見い出されたのでないことにおいて、主観的イメージ生存であつた。それらの欠落にもかかわらず、大切なことは内なる総体を主體的に問題にしていくなことによつて、1、総体が個別的状況といかにかわるのか。2、個別的状況は内面的にどのような自己規制としてあり、それは現象総体とのようにかかわるのか。生存の本質的形態に対するこの問いかけは、今日の状況の中にあつても本質的である。それは今の生存過程にある人類の

遍的が抽象的な時代をつくり、關係存在をつくり出し」といふこととにあるのではなく、具體的に彼はどのような時代に、どのように生存（行為）することによつて、どのようなものをつくり出したかかといふこと。その下を流れる人間生存の本来的具體性をどのように主體的につくり出したか。すなわち、自己の行為を他者との關係總體のなかで、世界（外的自然）をへて、問全体といかに對置することによつて、どのような世界と人間の全關係をつくり出したか。そこにおいて獲得された、すなわち、自己課題をいかに全體的課題と正確に普遍性の問題である。といふことが大切なのである。

65年度において我々はあのような時代に、あのよに生存（行為）することによつて、行為する自己としての個の確立を達成したのであつた。今、我々は今日の状況のなかで、具體性と実体性に対して、行為する他者としての自己の自覺から、世界の具體的実体に対し、その全的關係（人間生存の對象たる外的自然の今日の形態）を問うことによつて、人間の全體的生存そのものを擧る行為の全体において獲得しなければならぬ。しかし、問題は複雑である。全體的生存——それは今の生存過程にある人類の

抽象的規定であつて、具体的に人間一人々々はその個別的狀況（父親——彼の撮つてゐる写真、思考方法）のなかで、個別的な希望や野心、苦勞や心配、憎惡や愛、そして、個別的な思想と生活、そして、個別的な感性和自我をもつてゐる。そして、それら個別的なすべては一人の人間の内と外を総体との関連のなかで形成することに於て我々が人生と呼ぶものを形成している。

昔、行爲する自己として我々は「撮ること——それは人生を変えることだ」と叫んだ。今、行爲する他者として我々は「撮ること——それは、他者の人生（現在の形態）に到達し——（現実認識）人生の本来的なあり方（自然態としての人間生存）（——ユートピア志向——至ろうとするもの）」に向かつて、それらを変革し（——具體的行為の力学と工学——思想）それらの変革の全体像の中で、我々自身、人生を変えることだ」と信ずる。

人間と人間の關係。人間一人々々が意識的に外的に向かつて自己の生存を對象化するという事実。その今日の状況との関連において人間と人間の關係は實體と實體の關係である。據る行為——人間が生存するための外的世界（有機的自然）を對象化（非有機的自然への加へ）すること。據る行為は、今我々にとって、我々が生存するたための全体的方法（外的世界を——加丁的「變革的」——に對象化する）でなければならぬ。もはや寫眞は、一個人の思想の問題ではありえない。人間の今のあり方から出発して。「それじゃ、人間の今のあり方は本當に望まぬものなのだろうか。人間は今本當に自由、生きてゐるのだろうか。」この人間生存の本質的問いかけのなから。「それじゃ、今、歴史的變革主体として我々は、人類をどこに至らせようとするのか。文化とか、政治とか、思想とか、生活とかの分斷された二重構造ではない。眞の全体的な行動の起点をどこに求め、我々自身どこに至らせることから人類全体をどこに至らせようとするのか。」人間（他者）の生存（労働）を變質させるためには、具體的な生存条件（外的自然）に目を向けなければならぬ。他者の生存条件

（二面に続く）

狀況
1967

●一九六七年——一体何が起っただろう？
ベトナム戦争・黒人暴動・中東事変・革新都
政・授業料値上・L.A会議・新ナチ台頭・等
●一九六七年だがわれわれは生きている！

傍觀を許されぬわれわれは完全にそれに対する突破口をふさがれているかに見える。われわれは何をしたらよいのか？何をしなくてはならないのか？……………だがわれわれは知って

いる！
突破口の起点はわれわれ自身に他ならぬことを！

われわれの疑問はわれわれの行為でしか明らかにならないことを。そして撮ることに課せられた義務を

状況 67 それはわれわれの疑問であり、義務であり、起点に他ならない。

狀況 1966

3304

狀況 1965

280円

■全日本学生写真連盟

東京都新宿区三栄町二五三栄会館内
電話 東京(353)九四四二番

— 新たな全日活動の出発 —

ソレネ、ウリラム、クライン、ヨリス・イウエンス、アニエス・ヴェルダ、クロード・ルーシエ、ミシエール・レイ、クリス・マルケル等の作家や多数の技術者の無報酬の参加、カンパによる制作費の集め方といひ、この映画は無数の人々の参加による新しい闘ひであり連帯であり、ゲリラである。

互が、自らの個性や主張のためにはなく、それぞれの共通の動機——ベトナムで起つてゐることの意味の把握と具体化——問題の解決のために、そこにむけての行為としての映画。ここには、わずらわしい自我の固執ではなく、解決へむかう個がある。だからこの映画は、商業ベースへのとせざる必要など以外、名前を出したり、つかおとしたりしない。たゞ彼らのやつた行為の意味のみをよまににして、一つの切り離された

人間の行為は、状況の実体へむかう行為に変質する。

だがベトナムは全ての象徴であつたとしても、ひとりのベトナムであり、日本の問題は問題として多様である。ほとんど未解決のままの問題が無数にある。ベトナムはそのひとつであり「ベトナムから遠く離れてはそのひとつの方法にしかすぎない。状況は多様な方法を、必要としている。我々の目前にも解決を必要としている課題が無数にある。入りくみ重なりあいジャンルと化している巨大な未踏の世界が我々の前にあり我々個々の力を必要としている。

その総体へむかつて我々は我々を我々の実現へむけての闘ひを同時に押しすすめるゲリラと化してゆく。

また世界に動揺している。変革への人間の行為を見る時に感じずにはいられない我々。その姿を目前にする時、今日の時代に生きる我々にとって必要な行為は何か、その必要に向つて、個人の行為も、連盟活動も組織化されなければならぬのです。更に、今撮る行為が単に自分にとっての写真という領域から変革の領域へと拡大しなければならなくなった時、我々の撮る行為は、いつも現実に対する有効性の下に問われなければならぬ。即ち、今生きる行為を自己の内から発する事が出来ず、増々自己の内形作られる裏返し支配者の精神像をいかに打ち砕き、今日の人間の課題に真にこころをこめ、いかにかという視点を撮る行為の中に包含しなければならぬ。

この様な現実参加への撮影行動の方向性の下に、今我々の活動は個といかなる関係を基にして実際の活動プランを立てて遂行していくべきなのか。我々の活動は、一人一人が現実への自己の目立而契機を見出す事と、その契機自体を現実の側へ人間の全体的な課題へと対象化していかねばならぬ。

るに個人は自己の内に全体に向つて自己の視座を見出さな限りそこには向えない事なのだ。そこで少なくとも、個の課題(状態)とそこに提出される総体として向うべき全体的課題が非連続なものとしてでな連続したものとして提出されなければならぬ。

このような関係の下に、今自分達は「何を撮るべきなのか」そのための具体的方法とは何かという課題に向つて我々の連盟活動は実践的な活動プランが組み立てられているのです。それは「北海道百年——人間が刻んだ歴史——人間に刻まれた歴史」・「シシボジウム東北」・「中部シンボジウム」・「68・広島」。関東等での組織的な各サークルの撮影行動なのです。今、我々は以上のような撮影行動体系をこの日本の状況に対峙させようとしているのである。

例えば、東北では写真を撮る行為が一人の人間の肉體で生起するには、自分が自分の内部を覗き込む時、それは苦しい自分であり、絶叫せんばかりの自分であり、じ

は、自己の内側ひつたりと付着しているものであったり、自分が触れ合う外部に実在している何かに向かわない限り、そこからの出口はない。しかし、そのことが全体的に一人々々の中でどう意識化されているのだろうか……。

ある者にとっては、自分をどうあしらっている者に向う事をしなくても生存出来る在り方を生れてから今に到る生活の過程が彼の体内に母の安らぎの機しつくりと作り上げられているかもしれない。

北海道キャンペーン一九六八
北海道百年

人間が刻んだ歴史
人間に刻まれた歴史

今年、北海道の各地では、開道百年を祝う記念行事の準備がすすめられている。われわれはその中にあつて、それをただ単に「バンサイン」と祝つていられるどころか、観光のキャッチフレーズがいうように「明かろく、大自然に囲まれた北海道、秘境云々……」北海道を牧歌的で神秘的な北の国とあがれて訪ずれる観光客はふ

事が我々の生きる課題であり、また撮る行為の課題でなければならぬ。今、個人が具体的に感じている所からこの様に個の在り方を状況づけるものに向つて行為を起こそうとし、東北という歴史的かつ現代的な動きが交錯した愚に生じる状況をそのものを捉える視点を我々が包括した時、今の状態を感え、私的かつ個別的状況から東北の、否日本の状況へと戦いを進める活動として位置していくのです。北海道でも単に自然はいいと

える一方である。しかし、われわれが北海道を考える時、もつときびしくして、百年の中で人間が生きてきたものつことを感じてきたことに気がつく、われわれは今まで、写真を自分対写真という関係にすえていた。写真でなにかにむかうというのではなく、撮る方向が常に自分に向かうように

(六面へ続く)

人間が刻んだ歴史
|| 人間に刻まれた歴史

人間が刻んだ歴史
 人間に刻まれた歴史

今年、北海道の各地では、開道百年を祝う記念行事の準備がすすめられている。われわれはその中であつて、それをただ単に「バンサイと祝つていられるならうよ」に「明かろくなく、大自然に囲まれた北海道、秘境云々……」北海道を牧歌的で神秘的な北の国と描かれて訪ずれる観光客はふ

える一方である。しかし、われわれが北海道を考える時、もっときびしくして、百年の中で人間が生きてきたものゝことを感じてきたことに気がつく、われわれは今まで、写真を目分対写真といふ關係にすえていた。写真でなにかにむかうといふのではなく、撮る方向が常に自分に向かうように

(六面 続)

[illegible]

上記の本の御注文は振替又は現金書留を御利用の上下記宛にお申し込み下さい。(送料一冊に付 辛 90)

